



よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

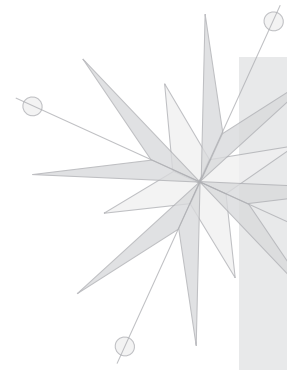
蔵通信

十六号

2008.12

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2008年12月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mxl.netwave.or.jp
http://www.ekingura.com/

シリーズ
絵金百話
第十五話
イノセント・ラブ



年に一度、夏の祝祭の場にのみ飾られる絵金（1812-76）の芝居絵屏風。極彩色の生々しい情念に満ちたその絵は時に忌み嫌われながら、同時に人々を魅了し続けてきました。
人の心が織りなす喜びや哀しみ、愛と憎悪の極限を描いた稀代の絵師金蔵。本展初出品の作品や土佐山田・八王子宮の巨大な絵馬台を含め、香南・香美市に伝わる彼とその弟子たちの芝居絵を一同に展示致します。
是非ご来場ください。



2009
1/20(火) - 2/1(日)

開催場所 香美市立美術館
開館時間 9:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
*初日20日(火)のみ13:00開館
休館日 1月26日(月)
観覧料 一般300円 高校生以下無料 *前売り無し
20名以上150円、身体障害者手帳・療育手帳・障害者手帳提示無料、
長寿手帳提示150円
主催 絵金蔵運営委員会 共催：香美市立美術館

★ 期間中タマリン館（南国市）にて現代作家による「絵金へのオマージュ展」開催！

関連企画／スケジュール

1月20日(火)	午後1時	オープニングイベント (於展示室 入館料要) 月岡祐紀子氏 警女唄「葛の葉子別れ」
	午後3時	ギャラリートーク
21日(水)	午後1時	ギャラリートーク
22日(木)	午前11時	ギャラリートーク
23日(金)	午後1時	ギャラリートーク
24日(土)	午前10時	ギャラリートーク
	午後1時	講演会 (入場無料) 鍵岡正謹氏 (岡山県立美術館館長) 横田 恵 (絵金蔵蔵長) ・鼎談 鍵岡正謹氏、青木淳氏 (多摩美術大学准教授) 横田恵 会場 プラザ八王子 (香美市立美術館) 3Fホール
25日(日)	午前11時	ギャラリートーク
	午後3時	ワークショップ「絵金カレンダー作り」 会場 プラザ八王子 2F (香美市立美術館) アトリエ 実費300円
26日(月)	休館日	
27日(火)	午後1時	ギャラリートーク
28日(水)	午前11時	ギャラリートーク
29日(木)	午後1時	ギャラリートーク
30日(金)	午前11時	ギャラリートーク
31日(土)	午前11時	ギャラリートーク
	午後1時	節付説法「弘法大師御一代記」 高知市・安楽寺住職 小角隆幸氏 (於展示室 入館料要)
2月1日(日)	午前11時	ギャラリートーク
	午後1時	素浄瑠璃公演 竹本美園氏 (於展示室 入館料要)

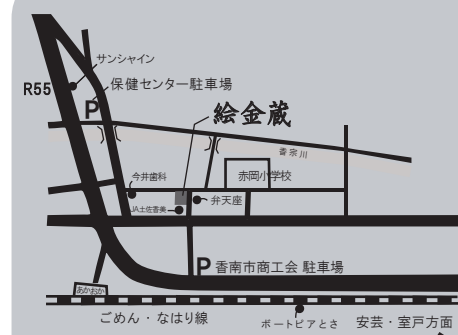
☆ タマリン館主催 特別企画
「玉造義隆 & 青木淳による
ギャラリートーク」
1月25日(日) 午後1時 タマリン館にて

祝祭に捧げた夢
—— 絵師金蔵の悦楽と悲哀



〔絵金蔵〕

開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)
観覧料
大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)
休館日
毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵（通称・絵金）。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

年に一度
：絵金の文化を
守るため
伝承
：次の世代へ
伝えるため
縁結び
：地域を超えて
世代を超えて

絵金の時代

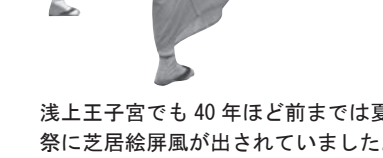


●は現在でも祭礼に芝居絵屏風が飾られている所。

VI つなぐ人々

土佐には芝居絵屏風を飾る夏の祭礼ばかりでなく、古くから伝わる祭が各地に残されています。

ここでは絵金とも関係の深い、香南市北部、香我美町浅上王子宮の秋祭をご紹介します。



浅上王子宮でも40年ほど前までは夏祭に芝居絵屏風が出されていました。現在では人手不足などの問題で行われなくなっていますが、屏風10点あまりが氏子たちによって大切に保存されています。



「花上野宮石碑 志度寺(部分)」
剣の腕を上げ父の敵をとる坊太郎

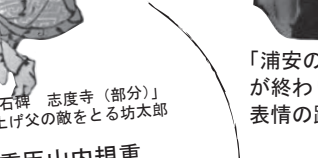
土佐7代藩主山内豊常の重臣山内規重(1682-1721)が山北に塾居させられたと、家臣たちが近くの若者たちを集め棒き、家臣たちが近くのはじめりと伝えられて術を披露したのがはじまりと伝えられています。呼吸を合わせて舞いますが、時折棒が折れるほど激しく打ち合います。飛び上がるこのポーズ、どこかで見たような…

2/21.22、NHKホールにて開催される「第9回地域伝統芸能まつり」に山北の棒踊りが出演します。京都の六斎念仏踊りや宮城県の花伏せの虎舞など他にもユニークな祭りがたくさん

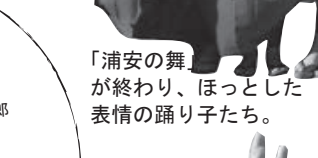
「地域伝統芸能まつり」出演決定！

ん登場！山北棒踊りは2/21のトリをつとめます。放送は3月上旬予定(詳細未定)。

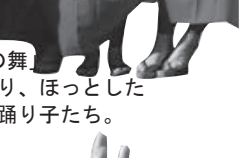
お問い合わせ ハローダイヤル 03-5777-8600



健康を願い、獅子に頭を噛んでもらう親子。



太鼓のシンプルなリズムに乗って踊る天狗。力強く、時に軽やかな美しい舞…



「浦安の舞」が終わり、ほっとした表情の踊り子たち。

絵金百話

第十五話 イノセント・ラブ

やおやしち うたざいもん

八百屋お七 歌祭文

< 概要 >

天和3年（1683）、恋人会いたさに放火事件を起こし処刑されたことで知られる八百屋お七。貞享年間(1684-88)に記された『天和笑委集』によると、お七は本郷森川宿の八百屋市左衛門の末娘で、16歳の暮れに家が類焼し家族共々正仙院という寺に避難したところ、この寺の住職寵愛の美少年生田庄之介と恋に落ちました。お七が新築の家に帰ってからも二人は忍び逢い、遂にお七は家が焼ければ再び正仙院に行けると思いこみ、3月2日自宅に放火、同月29日処刑され、庄之介は翌月寺を出て高野山で剃髪したと伝えられます。

一方、宝暦7年（1757）の『近世江都著聞集』ではお七の父を本郷追分の八百屋太郎兵衛、お七が14歳のとき丸山本妙寺から出火、避難した寺を小石川円乗寺、小姓の名を山田佐兵衛と伝えています。また吉祥寺門前に吉三郎という無頼漢ぶらいかんがおり、恋文の取次などをしてお七から金品を巻き上げ、ついにお七に放火をそそのかし処刑に追い込んだと記しています。

お七処刑から3年後の貞享3年（1686）井原西鶴がこの事件を『好色五人女』の巻四に取り上げ、町娘のいちずで可憐な恋心を描いて以降有名となり、浄瑠璃・歌舞伎共にさまざまな改作が重ねられ、お七ブームが巻き起こりました。放火に代わる筋として浄瑠璃「伊達娘恋緋鹿子」では主家の重宝を恋敵武兵衛が持っているとお七が、恋人吉三郎に知らせるため命がけで櫓の半鐘を打つ趣向が用いられ、この櫓を登るお七は吉三郎との濡れ場や引き廻しの場面と共に数多くの浮世絵に描かれています。

今回取り上げる紀海音作「八百屋お七歌祭文」*は元禄16年（1704）2月、大阪豊竹座で浄瑠璃として上演されました。『近世江都著聞集』で悪漢とされた吉三郎がここではお七の恋人に、お七一家が避難した寺は吉祥寺となっています。赤岡町本町四区に伝わる本作を描いた芝居絵屏風はお七と吉三郎の濡れ場でありながら吉祥寺住職を中央に配した一見不思議な構図ですが、艶めいた姿で鳥箒塵を持ち茶臼を挽く吉三郎、しなを作って恋の誓文を傍らに想いを訴えるお七、頭をぼんと打ちながら見てしまったからには嘘はつけぬと二人の恋の邪魔をするはずら者弁長、あくまで若い二人をかばう人の好い住職、原作のストーリーのままにそれぞれのキャラクターのポーズや表情を描き分け、小道具まで忠実に描いています。笑いあり涙あり今日も愛されるお七の物語をどうぞお楽しみください。

*歌祭文 近世俗曲の一。死刑・情死などの事件やその時々風俗をつづった文句を、門付け芸人が三味線などの伴奏で歌って歩いた。山伏が錫杖（しゃくじょう）を振り鳴らし、ほら貝を吹いて、神仏の霊験を唱え歩いた祭文の芸能化したもの（三省堂『大辞林』）。

や お や し ち う た ざ い も ん

八百屋お七 歌祭文

天和3年(1683)、恋人会いたさに放火事件を起こし処刑されたことで知られる八百屋お七。貞享年間(1684-88)に記された『天和笑委集』^{てんなしやういしゅう}によると、お七は本郷森川宿の八百屋市左衛門の末娘で、16歳の暮れに家が類焼し家族共々正仙院という寺に避難したところ、この寺の住職寵愛の美少年生田庄之介と恋に落ちました。お七が新築の家に帰ってからも二人は忍び逢い、遂にお七は家が焼ければ再び正仙院に行けると思いこみ、3月2日自宅に放火、同月29日処刑され、庄之介は翌月寺を出て高野山で剃髪したと伝えられます。

一方、宝暦7年（1757）の『近世江都著聞集』ではお七の父を本郷追分の八百屋太郎兵衛、お七が14歳のとき丸山本妙寺から出火、避難した寺を小石川円乗寺、小姓の名を山田佐兵衛と伝えています。また吉祥寺門前に吉三郎という無頼漢ぶらいかんがおり、恋文の取次などをしてお七から金品を巻き上げ、ついにお七に放火をそそのかし処刑に追い込んだと記しています。

お七処刑から3年後の貞享3年（1686）井原西鶴がこの事件を『好色五人女』の巻四に取り上げ、町娘のいちずで可憐な恋心を描いて以降有名となり、浄瑠璃・歌舞伎共にさまざまな改作が重ねられ、お七ブームが巻き起こりました。放火に代わる筋として浄瑠璃「伊達娘恋緋鹿子」では主家の重宝を恋敵武兵衛が持っているとお七が、恋人吉三郎に知らせるため命がけで櫓の半鐘を打つ趣向が用いられ、この櫓を登るお七は吉三郎との濡れ場や引き廻しの場面と共に数多くの浮世絵に描かれています。

今回取り上げる紀海音作「八百屋お七歌祭文」*は元禄16年（1704）2月、大阪豊竹座で浄瑠璃として上演されました。『近世江都著聞集』で悪漢とされた吉三郎がここではお七の恋人に、お七一家が避難した寺は吉祥寺となっています。赤岡町本町四区に伝わる本作を描いた芝居絵屏風はお七と吉三郎の濡れ場でありながら吉祥寺住職を中央に配した一見不思議な構図ですが、艶めいた姿で鳥簾塵を持ち茶臼を挽く吉三郎、しなを作って恋の誓文を傍らに想いを訴えるお七、頭をぼんと打ちながら見てしまったからには嘘はつけぬと二人の恋の邪魔をするいたずら者弁長、あくまで若い二人をかばう人の好い住職、原作のストーリーのままにそれぞれのキャラクターのポーズや表情を描き分け、小道具まで忠実に描いています。笑いあり涙あり今日も愛されるお七の物語をどうぞお楽しみください。

* 歌祭文 近世俗曲の一。死刑・情死などの事件やその時々¹の風俗をつづった文句を、門付け芸人が三味線などの伴奏で歌って歩いた。山伏が錫杖（しゃくじょう）を振り鳴らし、ほら貝を吹いて、神仏の靈験を唱え歩いた祭文の芸能化したもの（三省堂『大辞林』）。



伝播の諸相

～ お七伝説のゆくえ～

file no.1

東京都文京区

東京都文京区、円乗寺にはお七の墓があり、お七が亡くなった当時の住職が建てたと伝える供養塔や、寛政5年(1793)目千両といわれた女形歌舞伎役者五世岩井半四郎が建立したという供養塔が残されています。

一方、千葉県や岡山県にもお七の墓といわれる場所が残されています。

お七の事件は物語となり、伝説となって多くの民衆に愛され、広く各地に伝播していったようです。

file no.2

島根県松江市美保関町

島根半島東部、日本海に臨む美保関の古刹仏谷寺境内にお七の恋人、吉三郎の墓があります。

寺伝によれば、お七が処刑されたことを知った吉三郎は出家しお七の冥福を祈りながら江戸から西へ向かい、各地の名刹にお七の地蔵を建て遺品を納め歩いたといいます。そして元文2年(1737)10月4日当寺で70歳の生涯を終えました。

一方、秋田県や静岡県にも同様お七を弔う旅の途中果てたという吉三郎の墓が伝えられています。



「花・人・土佐であい博」冬の特別イベントで行われたキャンドル・ナイト。一つとして同じものがない、小泉純司氏デザインのお地蔵さまキャンドルには、町のおばあちゃんたちも大感激!



酷寒だった(南国土佐では、ですが)キャンドル・ナイト at 絵金蔵。あたたかい灯りが心に沁みました... 08.12.5, 6

2008年

ふゆのできごと



「冬夏」お約束。女装したお兄さん。似合ってます...



冬の夏祭りだけの通貨一両小判を売るおねえさん。

この冬も赤岡町横町商店街で冬の夏祭り開催(12.6、7)。路上こたつ&いろりはやっぱり子供たちに大人気。



森澤郁夫ジャズハーモニカライブ
08.11.23 in 絵金蔵

ジャズハーモニカプレーヤー森澤郁夫氏
演奏も優しい語り口も素敵でした。

窓の外は、異時同図法を用いた続きの場面。このあと、吉三郎会いたさに、お七はこたつの炭を使って放火し、火あぶりの刑と決まります。刑場へとお七を引き立てる役人に吉三郎は「**科の起りの本人は私にて御座候。…我等をお仕置きされよ**」と頼みますが聞き入れられず、冥途の道連れと先に自害して果てるのです。

美男子として登場する寺小姓・吉三郎。
茶臼を挽きながらお七と恋の問答を交わしている様子を艶めいた姿で描きあらわしています。「聞けば毎日堺町木挽町への御遊山に、歌舞伎若衆の美しい姿でうまい狂言を、ご覧じたく目でわしなどが抹茶ばかりとめ袖に、飽きの来たのは御尤も(中略)と、氣を持たす。」

吉三郎とお七の恋仲が皆に知れ渡った時、住職は二人をかばい、お七は自分に誓文を書いたのだと言い張りますが、もちろん僧は恋はご法度。その言い分を怪しんだ武兵衛に「これ御方、女房狂ひをなさるなら魚も定めて参るであらう。」と生ぐさ物を食べるよう責められ、困ってしまいます。



浄瑠璃台本の本文には出てきませんが、ここでは窓の外の火事をみつけ騒いでいる人々が描かれています。手を合わせる人、口をあぐり開けた人、のんきにお茶やお花を運ぶ人などさまざま。

12歳の少年僧・弁長。お七の「何時
見ても可愛らしい坊様じゃ巾着でも紙
入でも、欲しくば縫うて進じよぞや」
という口止めの甘い言葉にも惑わされ
ない、生意気なしっかり者。お七が書
いた誓文を指さしているはずなのにす
が、ここではどうやらお七の太腿が気
になっているよう…

お七は両親の参詣の後を追って吉祥寺にやっ
てきますが、吉三郎にご両親は二時も前にきてい
るのに、わざと後にやってきて味な趣向があつ
たものだ、と皮肉られ恋の問答が始まりお七は
誓いを迫ります。

吉三郎と同じく、この問答を艶めいた姿で描き
あらわしています。

〔参考文献〕

- *1『紀海音 並木宗輔壬瑠璃集』帝國文庫
- *2『歌舞伎登場人物事典』白水社 2006年5月
- *3『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
- *4『絵金蔵収蔵品目録』赤岡町 2005年2月
- *5近森敏夫『絵金読本』香南市商工水産課 2006年3月 改訂版

や お や しち うたざいもん
八百屋お七歌祭文

— あらすじ —

火事で焼け出された八百屋の娘・お七は吉祥寺に身を寄せる。そこで武家を勘当され寺小姓になっている吉三郎に出会い、密かに恋仲になる。やがて家が再建され、お七は吉三郎と別れ家に戻る。

その後お七は吉祥寺を訪れ、吉三郎に誓文を差し出し誓いを乞うが、少年僧・弁長にその誓文を奪われる。

そこへ吉三郎の父・源次衛門の家臣
十内が訪れ、吉三郎に出家を迫るが、
吉三郎は出家せず武士に戻りたいと打
ち明ける。

それを聞いていた萬屋武兵衛が現れ、弁長から入手した誓文を皆の前に出し、吉三郎が武士に戻りたいのは、お七と夫婦になりたいという不純な動機からだとなじる。住職はお七と吉三郎をかばうが逆に武兵衛に責め立てられ窮地に陥る。

吉三郎が自分のせいで住職が責められているのに何もしないで見ているのを見て、十内は武士の心を忘れたかと叱責する。さらに実は父・源次衛門は吉三郎が出家すると決断すれば勘当を解くと言い残して亡くなったのだと告げる。

その後、両親に吉三郎との結婚を反対されたお七は、実家の借金に質に武兵衛と結婚させられることとなった。一方お七を諦められない吉三郎は、お七の家に忍び入るが、結婚すると聞き、出家を決意して立ち去る。

それを知ったお七は、吉三郎会いたさに、また火事になればまた逢うことができると思い込み、放火し処刑される。吉三郎はお七の罪を被ろうとするが聞き入れられず、切腹する。

八百屋
九兵衛
武士
故・安森源次兵衛
家匠
十内
吉祥寺
住職
少年僧
弁長
寺小姓
吉三郎
お七
萬屋
武兵衛